



プロローグ 直方で過ごした子ども時代

小さい頃から本が好きで、よく家族が直方の図書館に連れて行ってくれました。子どもの頃は、外国の翻訳作品、日本の作品、ライトノベル、マンガ、なんでもいろいろ読んでいました。そのなかでも、イギリスのファンタジー作品が好きでした。近年映画化もされた「ナルニア国」シリーズや、「指輪物語」シリーズなどが印象に残っています。そこから次第に英文学への興味がわいていきました。

中学・高校は市外の中高一貫校へ進みました。通学の間も本をよく読んでいました。学校の司書の先生と仲良くなったので、放課後に友人たちと図書室によることもありました。

第1章 飛び出す イギリスへの留学

大学ではおもに英文学を学び、大学院まで進みました。そのとき海外で勉強するべきだと先生に勧められたのが留学のきっかけです。勉強できるなら行ってみたいと思い、家族の協力もあり、イギリスのレディング大学院へ留学しました。

イギリスでの暮らし

日常生活では、さまざまな点で、日本のきめ細かさを改めて感じるがありました。たとえば、2階建てバスの2階に街路樹の枝が当たっても断りの車内放送もないし、ぶつかりながら平気でどんどん進んだときは驚きました。電車は定刻に発車しないこともあり、出発直前に時刻が表示されたら慌てて乗りこむこともありました。また留学当時は「ハリー・ポッター」のブームがまだ続いており、私が入ったイギリスの大学院でも修士課程に進んだ学生ほとんどが「ハリー・ポッター」で児童文学に興味を持ったと話している。影響力の大きさを感じました。

第2章 巡り会う E・ネズビット（※）との再会

最初にネズビットの作品を翻訳で読んだのは子どもの頃です。その後、レディング大学院での作家分析の授業でネズビットの作品が2回ほど題材になりました。何度も採り上げられたのを意外に思い、大人の視点で改めて読み返してみるととても興味がわきました。そこでネズビットの作品を研究対象にしようと思いました。

個性的な女性作家

ファンタジー（幻想）とリアリズム（現実）、両方を描くのが非常に上手い作家です。日常の中に少し不思議な非日常が紛れ込むという世界観の描写が得意で、現代ではファンタジーの要素が含まれる作品ではよくみられる手法ですが、それを広めた作家のひとりとして残っています。「ハリー・ポッター」シリーズの作者や、「ハウルの動く城」の作者なども、ネズビットの作品から影響を受けたとされています。

作品だけでなく本人も個性的です。普通は物語ありきで挿絵が描かれますが、原稿が間に合わないときは筋骨きメモだけを画家に渡して挿絵を任せ、その絵に触発されて物語を仕上げるような、型破りな一面がありました。また、おしゃれに興味があり、当時は風変わりとみなされたスタイルのドレスを好んで着ていたそうです。

※ Edith Nesbit
イーディス・ネズビット（1858～1924）
イギリスの小説家、詩人。「イギリス児童文学の黄金時代」に活躍し、いまでも愛読される子どもの本を残した。代表作『砂の妖精』など。

第3章 紡ぐ 作品翻訳への道

翻訳家という仕事にはずっと興味がありました。いつか研究対象にしたネズビット作品を翻訳したいと思っていたので、論文の指導をしていただいた先生に相談してみました。すると出版社に売り込みしてみないかと知り合いの編集者の方を紹介してください、その方に興味を持ってもらえたので作品の翻訳をすることができるようになりました。

ストックは豊富に

読者に意味を理解してもらえ文章に仕上げるためには、言葉のストック、つまり語彙を増やす必要があります。そのためにはとにかく本を読むしかありません。特に日本語に関しては、古典を読む必要性も感じています。

作品が生まれるまで

ネズビットの作品は既に訳出されているものがありますので、それらの本の雰囲気を引き継ぐことを意識しました。また作品が出版された時代も考慮しました。私が関わった2冊のネズビットの作品は、日本で言う明治時代に書かれた作品なので、夏目漱石の作品やディケンズの翻訳などを並行し

て読み、古風な言葉遣いを意識しながら作業しました。さらに、出版社から「大人も読めるファンタジーにしたい」という意向を受けたので、少し漢字を多めに使用する点などに気をつけました。そのうえで、外国語（英語）の文章が日本語の文章として新たに生まれる過程に携われるところが翻訳のおもしろさだと思います。

ネズビットの本の翻訳に参加したときは、共訳者の先生、編集者、校正者、装丁家、印刷会社、書店など、多くの人が関わって本に仕上げてもらえたのを実感しました。

Eピローク 知らない世界への扉

ドラマやアニメなどの映像作品を見て興味がわいたら原作本を読んでみて、本の世界観を改めて知る。自分の手に取りやすいジャンルから、少しずつ世界を広げていくのもいいと思います。

また、いまいる世界から一歩踏み出して、異なる環境の人や異文化と接するだけでも世界は広がります。次世代の人たちにも、さまざまなジャンルの本を読んだり知らない世界を経験したりすることで、内面を豊かにしていきます。

永島憲江（ながしまのりえ）

昭和52年11月生まれ。感田小学校卒業。国際基督教大学、イギリス・レディング大学両校の大学院にて修士課程修了。白百合女子大学大学院にて博士課程修了。大学での非常勤講師などを経て、現在は『オックスフォード世界児童文学百科 第二版』翻訳メンバーの一員として参加中。

※アーデン城の宝物・ディッキーの幸運（東京創元社）



E・ネズビットによるタイムトラベル・ファンタジー2部作。
（井辻朱美・永島憲江 訳）

その他の執筆に参加した著書

- ※『世界少年少女文学ファンタジー編・リアリズム編』（いずれも自由国民社）
- 『子どもの本と＜食＞ 物語の新しい食べ方』（玉川大学出版部）
- 『英語圏諸国の児童文学 I—物語ジャンルと歴史（改訂版）』（ミネルヴァ書房）

※は市立図書館蔵書

